



Title	<翻訳>フワン・デ・サンタ・クルス・パチャクティ・ヤムキ著『ペルー王国の昔の出来事に関する報告書』(3)
Author(s)	染田, 秀藤
Citation	Estudios Hispánicos. 2002, 26, p. 181-203
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93884
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(史料翻訳)

フワン・デ・サンタ・クルス・パチャクティ・ヤムキ著
『ペルー王国の昔の出来事に関する報告書』(3)^{*}

Juan de Santa Cruz Pachacuti Yamqui
Relación de Antigüedades de este Reino del Perú

染 田 秀 藤

ヤワル・ワカック・インカ・ユパンキが老衰して他界すると、ウイラコチャンパ・インカン・ユパンキ[通称ビラコチャ。以下、ウイラコチャンパと略記]が後継者として国を治めることになった。ウイラコチャンパはアンタ生まれのママ・ロントカイと結婚し、その結婚式と戴冠式には、[アンデスの]すべての領邦から住民[の代表]がこぞって参列した。もちろん、ハトゥン・コリヤスを率いるチュチ・カパックも結婚の宴に馳せ参じた。彼は輿に乗り、貴族や警護の者を従え、立派に飾り立てた偶像、つまり、ワカを伴ってやって来た。そして、チュチ・カパックはウイラコチャンパ王に何度も執拗にこう語りかけた。

「あなたはクスコの王、私はコリヤの王だ。さあ、酌み交わそう、食事を頂こう。二人きりで話し合おうではないか。私は銀、あなたは金[の上に腰を下ろしているの]だ。あなたは世界の創造主ヴィラコチャを、私は太陽を崇拜している。」[原文はケチュア語]

ウイラコチャンパ王は心根の優しい人物だったので、チュチ・カパックの話の一部始終に頷いた。伝え聞くとところによれば、ウイラコチャンパ王は実に温和な性格の持ち主で、館やサクサワマン砦を建設したり、畑を耕したり、ハンノキやキスアル[おもに海拔三二〇〇～四〇〇〇メートルの高地に生育する樹木]、チャチャコマ[黄色い花をつける高山植物]、モレエ[その実はチチャの原料となる]などを植樹したりして暮らし、[血なまぐさい]戦いには、ほとんど関心を寄せなかった。

ウイラコチャンパ王には、インカ・オルコン[インカ・ウルコ]という名前の庶子がいた。そして、インカ王は存命中に王国[の支配権]をその息

^{*}本稿では、紙幅の関係上、通説にいう第八代インカ王ビラコチャから第十一代のワイナ・カパックの戴冠式までを訳出する(原文：17r—31r. pp. 53—91)。

子に譲り、大軍を率いてコリヤスーヨの人々を征服しに向かわせた。〔しかし〕インカ・オルコンは〔まだ分別を弁えない〕若者で、遠征に出る前、実に高圧的な態度で貢物を差し出すよう命じたため、どの地方の人々も、インカ・オルコンを土地の支配者と認めて臣従を誓っていたわけではなかったので、貢納する意思はないと答えた。

インカ・オルコンはかなり強力な精鋭部隊を一隊派遣し、新しく征服に乗り出したが、〔インカ支配に〕従順な人々の忠誠心を慮ることなどなかった。精鋭部隊はカウイニヤ人の居住する地方を進軍し、一方、インカ・オルコンはコリヤスーヨの人々を制圧しに向かった。そのとき、彼は先祖の目に触れれば、必ず加勢してもらえらるだろうと思って、マンコ・カパックの像〔グアナカウリ〕を持参した。ところが、それが災いし、インカ・オルコンは、ワイワ・カンチスの人々を治めるクラカ、ヤムケ・パチャクティの手に掛かり、ワノカリヤで戦いに敗れ、殺害された。その結果、部下の兵士たちは甚だしい屈辱を味わい、クスコへ退却した。

そのころ、アンコアリヨ人とチャンカ人がクスコの町の包囲をはじめた。油断していたウィラコチャンパ王は異変に気づいたものの、どう対処したらいいのか分からなかった。そこで、王はアンコアリヨ人とチャンカ人を率いた部将のもとへ使者を送って伺いをたて、結局、和平を結ぶために、ユンカイパンパの地まで出向くことになった。そのとき、正妻の子インカ・ユパンキが父ウィラコチャンパ王に同行したが、〔実は〕インカ・ユパンキは、〔異母兄弟にあたる〕インカ・オルコンが存命中、父王から疎まれていたのであった。〔ところで〕インカ・ユパンキは周りが敵だらけであることを知って悲嘆に暮れ、「なんていうことだ」と呟いたあと、目を上げ、じっと空を見つめた。それから、彼は〔和平協定を結ぶための会見場所であった〕カリヤチャカを目前にして、〔夢遊病者のように〕よろめきながら、また、胸の引き裂かれる想いで、クスコへ蹠を返した。インカ・ユパンキはひとり、自分の館へ向かって歩を進めていた時、ルクレの側に聳える高い山の上に、白い肌をしたとても美しい若者が佇んでいるのに気づいた。その若者はインカ・ユパンキにこう告げた。

「息子よ。あなたはこれまで苦難に直面したとき、いつも創造主の名を呼んでいた。いま私はその創造主にかわって約束します。しかと申し伝えますが、創造主はあなたの話に耳を傾けられました。つまり、創造主はあなたを守り、あなたは勝利を手にするようになるでしょう。だから、何も

恐れずに戦いなさい。」

そう告げると、若者は姿を消した。伝えられるところによると、インカ・ユパンキは若者の話を聞くとたちまち、元気を取り戻した。その様子は、若輩にもかかわらず、さながら百戦錬磨の指揮官を思わせたという。インカ・ユパンキは館に到着すると、部下たちに大声で危急を告げ、さらに、こう〔創造主に〕尋ねた。「あなたは私をクスコの王とされた。どうかお救いください。いずこにおられるのですか」〔原文はケチュア語〕と。インカ・ユパンキはじっと空を見つめながらそう呟いたのち、武器庫へ入り、武器と防具をひとつ残らず取り出した。ちょうどその頃、父ウイラコチャンパ王が派遣した二〇名のオレホン、つまり、親族たちが到着した。彼らは男女を問わず、全員が武装し、太鼓を打ち鳴らし、ピリユリュ〔骨で作った笛〕、ワイリヤキパ〔貝殻で作ったトランペット〕やアンタラ〔オルガンのように小さな笛〕を奏でながら、トパ・ヤウリやカパック・ウナンチャ〔御旗〕が保管されていた神殿へ入り、歴代インカの御旗を取り出し、高く掲げた。しかし、〔なんとしたことか〕彼らはトパ・ヤウリを持ち出すのをすっかり忘れていた。

インカ・ユパンキにとり、クスコの町とその広場は最も安全な場所、すなわち、砦であった。そして、部下たちは十ヶ所に分かれ、大声を上げながら太鼓を打ち鳴らした。クスコの町への攻撃がはじまり、敵の投げた最初の石が王子インカ・ユパンキに命中した。打ち倒された王子はなかば昏睡状態に陥ったが、その時、天から囁くような声が聞こえた。その声はインカ・ユパンキに、なぜトパ・ヤウリの杖を持ってこなかったのか、その理由を尋ねたらしい。すると、インカ・ユパンキは立ち上がるやいなや、一目散に神殿へ向かい、トパ・ヤウリの杖を取り出した。それから、激しい戦闘が繰り広げられていた場所へ舞い戻り、兵士や指揮官たちの士気を鼓舞した。

一方その間、父ウイラコチャンパ王と最も血縁関係の濃い縁者で、コリカンチャを管理していたトパ・ワンチレという名の老人がプルン・アウカという石を数列〔順序よく〕並べ、その石に棍棒とともに、盾と兜をもたせかけた。それは、遠くから見れば、兵士が整列して座っているように見せかけるため〔の策略〕であった。王子インカ・ユパンキはいま一度、父ウイラコチャンパ王の派遣した援軍の存否を確かめたところ、遠方にその石の列が見えたので、こう呼びかけた。

「そのようなところで、何をしているのだ。この機におよんで、よくもじっとそこに座っておられるものだ。さあ、起立せよ。」

〔石に向かって〕そう命じたあと、インカ・ユパンキは部下たち—大部分がすでに降伏寸前であった—の居場所へ戻った。それから、兵士たちに向かって、「館へ退却だ」と叫んだ。

チャンカ人たちは怒濤の勢いで押し寄せ、彼らを追いつめた。そのとき、例の石を兵士だと思い込んだ王子インカ・ユパンキは怒りに身を震わせながら、石に向かって命令を下した。つまり、こう叫んだのである。

「もはや、戦って勝利を手にするか、討ち死にするかのいずれかだ」と。

チャンカ人たちは、ブルン・アウカの石が順序正しく並べられた場所へ侵入した。すると、石はまるで古参の兵士のように起立し、チャンカ人をはるかに凌ぐ勢いで戦いに打って出て、アンコアリヨ人やチャンカ人を一掃した。その後、王子は連戦連勝を重ね、キヤチレまで軍を進めた。キヤチレで、インカ・ユパンキは敵の部将たち、つまり、トマイ・ワラカ、アスト・ワラカとワスコ・トマイ・リマイの首を刎ねた。

インカ・ユパンキはキヤチレの戦いに大勝し、勝利を確実なものにした。伝えられるところでは、そのとき、チャニャン・コリ・コカウという名前の未亡人がまるで男のように、勇敢に戦ったらしい。それから、王子はクスコへ戻り、父のもとへ贈り物として敵将の首を送り届けた。それを知って、アンコアリヨ人とチャンカ人、それに、彼らのクラーカたちも怖気づき、一目散に逃げ出した。

一方、ウィラコチャンパ王は〔自分の行動を〕心から恥じて、二度とクスコへ戻らず、ポママルカに居を構え、そこで余生を送った。

若くして新しい君主となったインカ・ユパンキはさらに大勢の人員を募り、アンコアリヨ人とチャンカ人を追撃した。一行はアプリマクへの途中、川の上流あたりで、敵軍と遭遇した。そのとき、チャンカ人は〔インカ軍を率いた〕実に勇猛な部将をめがけて大きな石を落とし、彼を殺害した。死に際に、ウィルカキレという名のその部将は王子に向かってこう語った。「私はまだひとつも武勲をあげていない。それなのに、戦うことなく、死んでいかねばならないのか」と。インディオたちの話によれば、ウィルカキレはさらに言葉をつづけて、「このまま私の骸をこの場に残して欲しい」と頼んだらしい。そこで、インカ・ユパンキは彼の亡骸を一本の木のそばに埋葬

するよう、つまり、幹あたりの土を掘り、彼の亡骸をすっぽりその穴に埋めるよう命じた。それから、インカ・ユパンキは兵士に向かって、その木がつける実は(ウィルカと呼ばれる)薬、すなわち、身体からあらゆる悪い体液や胆汁を取り除いてくれる薬になるだろうと語った。

インカ・ユパンキは敵を追ってアンダワイラスまで進軍し、そこからクスコへ引き返した。それから、インカ・ユパンキはコリャスーヨの住民を一人残らず征服する企てに着手し、さらに、領土の平和を維持するため、他の地方の住民たちを制圧した。そのとき、インカ・ユパンキは名声の誉れ高い部将ヤムケ・パチャクティというクラーカと出会い、兄オルコンを殺害してくれたことに対し感謝の辞を述べた。そうして、インカ・ユパンキは領土の平和を確立し、パチャクティ[「時代の変革者」の意]という名をかたった。さらに、その名をインカ・ユパンキという名前の前につけ加え、自らパチャクティ・インカ・ユパンキ[以下、パチャクティと略記]を名乗ることになった。

パチャクティはコリャスーヨ地方一帯を抑えたあと、チャヤ人とカラバヤ人の征服に向かった。そのとき、パチャクティは実に下賤な偶像を発見した。パチャクティはチャヤ人とオリャチュエア人の住む土地を破壊して略奪の限りを尽くし、アヤパタに守備隊を残した。それから、クスコへ戻り、今度はアンコアリヨ人とチャンカ人の平定に向かった。その遠征で、パチャクティは行く先々で戦いに勝利し、住民を支配下に置いた。パチャクティは四万の兵士を率いてビルカス・ワマンまで軍を進め、ビルカス・ワマンでは、途轍もなく大きくて黒い、しかも、実に醜悪なクラーカの姿をしたワカ、つまり悪魔の偶像を七体、発見した。それらの偶像はそれぞれ、アイサウィルカ、パリアカカ、チンチャイコチャ、ワリャリヨ、チュキワクラと呼ばれ、残り二体はカニャル人のワカであった(パチャクティがクラーカの姿をしたワカと遭遇した場所はワマニイと呼ばれている。主イエスよ、許し給え)。

さらに、パチャクティはウチュク・オリュコ[洞窟に住む毛深い小動物]、シケ[兎狩り用のイタチ]、アチョカリヤ[悪魔・有袋目の動物]と出会った。パチャクティは彼らを捕まえ、悪魔祓いを行い、罰として、クスコへ行ってサクサワマンで砦を築くよう命じた(インディオたちの話では、それらのワカ、つまり、悪魔はインカ王の殺害を計ったらしい)。さらに、パチャクティはそのワカたちに、サクサワマンでの仕事が終われば、ひきつづき、

パチャカマックもしくはチンチャの海岸で望楼の建設作業に従事するよう命じた。そうして、彼らは命令どおり海岸に望楼を建てたが、インディオたちの話によると、ワカたちはその罰に相当苦しんだらしい。

その間に、パチャクティはアンガラエス、チョコルボ、ルカナス、それに、ソラスの各地方をひとつ残らず征服した。王は、タヤカハのワンカ人が戦いと防衛の準備を整えているという情報を耳にするや時を移さず、パウカライとルミワシに全軍を集めて本陣を置き、軍団を三つ編成した。それは、兵士が全員、指定された日に隊を乱さず三ヶ所から別々に侵入し、ハトゥン・ワンカ・ハウハの盆地や地方を完全に手中に収めるためであった。

ワンカ人は全員の総意のもと、大量の食糧と飲み物や贈り物を携え、少女たちを連れてパウカライへ向かって出発した。ワンカ人は携えていた武器を〔インカ軍に〕引き渡したので、パチャクティは満足し、彼らが領土の平和を守るために帰順したことに謝意を表し、三つの共同体〔アイユのこと〕を治めるクラーカ全員に報酬と褒美をつかわすことを約束した。すなわち、インカ王は彼らに、クラーカとしての本来の地位を認め、さらにアポの称号まで与えたのである。パチャクティはわざわざクスコまでやって来た一人のクラーカには、貴族の称号を授け、黄金の草鞋オホクを履くよう命じ、アポの肩書きを与えた。

インカ王パチャクティはハウハ盆地へ入り、アンコアリョという名の宿敵を追撃した。パチャクティはタルマ、コリヤパンパ、ワヌコを通り、ワヌコからワマリエス、そして、ワイラスとチュキラクアイの中間地帯を進んだ。一行はカハマルカを通り過ぎたが、そのとき、住民が死人の亡骸を食している地方に出くわした。そこから、パチャクティはリャノ〔海岸部〕へ下らずに、そのまま〔山岳地帯を〕進軍し、カニャル人の住む土地へ達した。そこで、インカ王は大勢の呪術師や数多くのワカに遭遇したが、そのまま素通りし、ワンカウシルカへ進軍した。そのとき、パチャクティはカニャル・カパックから大量の糧食を受け取った。

アンコアリョ人は偶像を掲げて密林地帯を奥深く入り込んだので、パチャクティは〔追撃を諦め〕ワンカウシルカから、大量の金と銀やウミーニャ〔貴石〕を携えて〔クスコへ〕戻ることになった。〔クスコへ戻る〕途中、インカ王はユンガ人の住むある島へ到着し、その島で、真珠貝(チュロイママンと呼ばれる)だけでなく、ウミーニャも真珠貝にまして大量にあるのを発見

した。そこから、パチャクティはチモ[チムー]地方を治める村へ向かって出発し、その村で、チモ・カパックとキル・トメ(ユンガ人が住む地方を治めるクラーカ)と出会い、一体の偶像、つまり、ワカを発見した。チモ・カパックとキル・トメはパチャクティに臣従を申し出て、必要なものを一つ残らず提供した。同じくカハマルカでも、地方一帯を治めるクラーカ、ピサル・カパックがパチャクティに臣従を誓い、必要な物資をすべて差し出した。

また、パチャクティは石製の鐘のついた別のワカも見つけた。それから、インカ王はユンガの人々が暮らすリマック地方へ向かい、独自のワカを崇めていた寒村を数多く発見した。またリマック地方で、パチャクティは途方もない悪魔、チュスピ・ワカ、ポマ・ワカとアイサウイルカも発見した。その後、インカ王はパチャカマックへ達し、さらにチンチャまで足を伸ばし、そこでも、ワカを見つけた。チンチャから、パチャクティは先記のパチャカマックへ引き返し、同地で数日間、英気を養った。そのとき、天から雷が降り、稲妻が落ちたので、ユンガの人々は不安に怯えた。パチャクティは他の地方の場合と同様、住民たちに貢物を要求せずに立ち去った。

パチャクティはママとチャクリヤを通過してボンボン、そして、ハウハへ進み、ハウハからは、休息もとらずワンカベリカを縦断した。ワンカベリカでは、インカ王は、部下が喉の渇きに苦しんでいたとき、猫額ほどの平地にチチャが自然と湧出する泉が二つあるのを発見した。ワンカベリカの住民たちはインカ王に赤色のイチュマ[顔料?]を差し出した。ヤウヨ人とオマ人も贈り物として金銀を持参し[たので]、パチャクティは[貢物を要求せずに]彼らのもとを去った。

インカ王はビルカスのはるか先に位置するワマニン[もしくはワマニイ]へ到着した。そこは、かつてパチャクティが醜悪な姿をした七体のワカを初めて目にしたところであった。インカ王は戦いに勝利し、戦利品を獲得したことを記念して、ワマニ[ン]のオスノ[ウスノ?]に金と銀の標識を埋め、途轍もなく大きなインディオの姿を象った偶像、すなわち、悪魔の両手を縛りあげた。パチャクティ王がビルカス・ワマンに到着する以前、クスコへ通じる街道の途中に位置する酷暑の土地、ポマコチャに滞在したころ、アマロ・ユパンキという名前の嫡出の長男が生まれた。そのため、インカ王はポマコチャで数日過ごした。

伝えられるところによると、ちょうどそのころ、パチャクティのもとに、

クスコで起きたある奇跡にまつわる報告が届いた。すなわち、一匹のヤウ
イルカ、つまり、アマロ[大蛇]がパチャツサンの山から出てきたというの
である。ヤウイルカは実に凶暴な獣で、全長が半レグア、胴回りが二ブラ
サ半もあり、耳は垂れ下がり、鋭い牙をむき、あご髭をたくわえていたら
しい。その獣はユンカイパンパとシンカを通り、そこからキウィパイの湖
へ入った。そのとき、アウサンガテ[山]の方から二つの[彗星]が現れ、一
つはアレキパのプティナ[火山]の方へ、いま一つは雪に覆われた高い山が
三つないし四つ聳えるワマンガのはるか南方へ流れて消えた。インディオ
たちの話では、その火の玉は翼と耳と尻尾のついた四足獣で、背中には魚
の背びれのようなものが生えていた。さらに、伝え聞くところによると、
遠くから見ると、それは炎のように見えたらしい。

そのころ、パチャクティは[ポマコチャから]クスコへ向けて出発した。
クスコに戻ったインカ王は、父のウイラコチャンパがすでに高齢に達し、
病床に伏しているのを知った。パチャクティはクスコに帰還して到着の祝
宴を執り行ったあと、パチャ・ヤチャチのカパック・ライミの厳粛な祭り
を催した。パチャクティは父ウイラコチャンパに息子、つまり、父の孫を
披露したあと、王子の誕生を祝う祭宴を開いた。王子はアマロ・トパ・イ
ンカと呼ばれた。インディオたちが奇跡だと言ったのは、王子が誕生した
とき、それまで身を隠していた獰猛な獣が一頭残らず、クスコ周辺から追
い出されたからであった。

そのころ、カラバヤのクラーカとミティマエが色とりどりの斑点のある
動物、チュキ・チンチャイ(オトロongoのアポ=「ジャガーの頭」だと言われ
ている)を[捕らえて]連れて来た。パチャクティはその動物の見張りに両性
具有者、つまり、二つの性を備えたインディオをつけ、さらに小人やせむ
しを一人残らず、召集するよう言い渡した。インディオたちの話では、小
人やせむしはいつも、王子が身につける衣服を編む作業に従事した。同じ
く、インディオたちの伝えるところでは、そのインカ王子のために、彼ら
は夜光性の石[猫のような四足獣の額にあるといわれた石]を持参した。そ
れはアブリマックに巢食うオスコリヨ[山猫]の額から抉り取ったものであ
った。

このパチャクティは戦いにおいても蓄財においても、実に幸運に恵まれ
たので、住民たちは一人残らず、その支配に畏怖の念を抱いた。パチャク
ティは父親、つまり、性根の悪い老人[ウイラコチャンパ]が亡くなったと

き、ビクーニャの毛で編んだ白い喪服を身につけた。そのとき、パチャクティは父とは絶交していたので、こう告げた。

「歌を口ずさみたい気分だ。とうとう老人は死んだ。天寿をまっとうしたのだ。」

インディオたちの話では、パチャクティは軍人全員に、戦さのときのように、兵士を観閲するよう命じ、さらに、故人、つまり父の亡骸を先頭に、彼の旗印と武器を担いで町中を練り歩くよう指示した。兵士たちは一人残らず、大きな盾と槍と棍棒(リャカチュキ、チャスカチュキ、スルクチュキ)に身を固め、軍歌を口ずさみ、太鼓をゆっくり打ち鳴らした。そのとき、亡き父の親族や父に仕えた女性たちはこぞって、まったく別行動をとった。そして、彼らはインカ王のことを、父の死を喜び、陽気な歌を口ずさんでいるといって非難した。

父に仕えた女性たちは別に隊列を組んで行進し、全員、泣き叫び、涙を流した。彼女たちは髪の毛を刈り、腰には黒い帯をつけ、顔全体を真っ黒に塗りたくり、額にはキチュアの房で作ったトゥミサ、もしくは、キスアのウインチャ[額につける帯]をつけていた。彼女たちは半裸の状態で、キチュアやコヨやシウィカ[いずれも縄を編むのに用いられる藁]で自分の体を鞭打った。中には、ちっぽけな小太鼓をもち、自分の頭に灰を振りかけていた女性もいた。

パチャクティは[その中に]義母—兄弟のアウキ・ルパカの母親—の姿を認め、女性たちがなにも身につけず、乳房を垂らしたまま、ウインチャやキチュアのピリョ[頭当て]や髪飾りをつけ、真っ黒な灰と獣脂を体中に塗り、小さな太鼓の伴奏に合わせて体を鞭打ち、涙を流しているのを狂気の沙汰だと考え、その振る舞いを嘲り笑った。そのように泣き叫ぶのは間違いなく悪魔たちのなせる業であった。

インディオたちの話では、そのパヤクナ[「貴婦人」の意]、つまり、[インカ貴族の血を引く]未亡人や老女たちはその一週間ずっと休む間もなく、故人を見つけようと、故人がかつて足を運んだ場所を隅々まで探し歩いたらしい。さらにインディオたちの話すところによると、その老女たちは、故人の足跡を発見しようと、自分の家の周りに篩にかけた灰を撒いた。パチャクティは、彼女たち[のその行動]を嘲り、司祭のような外套を身にまとった若者を数名派遣し、家の周りに撒かれた灰の上を歩かせた。そして、明け方に、インカ王は彼女たちにこう尋ねた。

「可哀想に、年老いた母君よ。あなたはそれほどまで夫、つまり、わが父を愛しているのですか。あなたは十分に涙を流された。あなたが死んでも、あなたを想ってそのように涙を流してくれる人はいないでしょう。」

ついに、パチャクティはコンデスーヨの人々の征服に乗り出し、コリャオを通過した。コリャオでは、インカ王は妖術師[偶像崇拝者のこと]として名高いコレとカマンチャカのインディオと出くわした。そこから、パチャクティはアレキパ方面へ下り、チャチャ、ハトゥン・コンデ、そして、チュンビヴィルカ人の居住地を通過し、さらにパリナコチャからカマナーへと軍を進めた。その後、インカ軍はアイマラ人、チルケ人、パブレ人の住む地方を横断してクスコへ戻った。パチャクティはクスコへ入城し、祭宴を催した。インディオたちの伝えるところでは、そのとき、インカ王は大量の金銀のほかに、鯨を一頭、運ばせたらしい。

そのころ、カパクヨ[クヨ地方の支配者たち]が貧しい一人のインディオにリイプタ[コカと一緒に食べる灰の粉]を詰めたウルティス[袋]を持たせて[クスコへ]派遣した。彼はパチャクティを亡き者にしようと、王の頭に一撃を加えたが、[逆に捕らえられて]拷問にかけられた。そのインディオはキキハナ地方のカウイニャ人であることを自白し、カパクヨの命令でインカ王を殺しにやってきたと白状した。そこで、パチャクティはカウイニャ人の殲滅を命じ、彼らの住む地方で破壊の限りを尽くした。すると、カウイニャ人たちはインカ王に弁明した。すなわち、悪いのはカパクヨだ、と言い訳をしたのである。カパクヨのクラーカたちとは、ハナン・サヤとウリン・サヤを治めたアポ・ララマとヤムケ・ララマであった(彼らは女、子供、老人を除き、納税義務を負うおよそ二万人のインディオを支配していた)。その結果、クラーカたちは徹底的に破壊された。伝えられるところでは、彼らはワカのカニャクアイの助言によってインカ王を亡き者にしようと謀ったらしい。

そのころ、第二子のトパ・インカ・ユパンキが生まれた。

パチャクティは一〇万の部下を従えてコンデスーヨの人々の土地へ侵入し、彼らを征服した。そのとき、ワカのカニャクアイは猛炎を上げて燃えさかり、パチャクティ一行が通過するのを妨げた。そして、最後に、恐ろしい蛇が姿を現した。インディオたちの話によると、その蛇はインカ軍の兵士を大勢、のみ込んだらしい。パチャクティはその出来事を聞いて、大いに心を痛めた。インカ王は苦悩し、天を仰いで、天地の創造主に救いを

求めた。すると、空からアワンカーナ(すなわち鷲)が唸るような音を立てながら凄まじい勢いで舞い降り、蛇を襲い、頭部を鷲づかみにして空中高く放り投げた。すると、蛇はそのまま地上に落下し、ずたずたになってしまったという。同じように、仲間の鷲もまた、インカ王の異腹の兄弟、部将トパ・カパックを捕らえようと懸命に大樹を這い登っていた蛇を粉々にした。話によれば、[蛇にのみ込まれた]インディオたちはほとんど全員、死なずに生還したらしい。インカ王はその奇跡を記念して、その地方のアンデンに石に彫った蛇(ワティピルカ=「不吉な前兆の壁」と呼ばれる)を据えるよう命じた。

それから、インカ王はクスコへ帰還したが、そのとき、王はすでに老齢に達していた。そのころ、インカ王のもとに、一隻の船がアンデスの向こう側に広がるいまひとつの海を渡っているという知らせが届いた。

その一年後、一人の若者が大きな書物を携えて広場へ到着し、その書物を年老いたインカ王パチャクティに差し出した。ところが、インカ王は若者やその書物に関心を示さず、召使に書物を保管するよう預けた。すると、その若者は召使いから書物を取り上げ、そのまま広場を出て、角を曲がり、姿を消した。もっともその後、パチャクティは若者の正体を探るよう命令を下した—その正体は誰にも分っていない—。そのため、インカ王はトコカチで六ヶ月間、断食を行い、その間一度も外出しなかった。

やがて、年老いたインカ王パチャクティは王国を息子のアマロ・トパに譲ろうとした。しかし、アマロ・トパは父の申し出を固辞し、むしろ畑仕事や建物の造営に精を出した。その様子を見て、パチャクティはアマロ・トパに、王国を弟トパ・ユパンキに任せてもいいのかどうか尋ねた。[アマロ・トパは頷き、一方]トパ・ユパンキは心から喜んで王国を受け継いだ。そういうわけで、パチャクティはすべての領邦の人々に[クスコへ馳せ参じ]、トパ・ユパンキを支配者として認め、臣従を誓うよう命じた。そして、ことは思惑どおりに運んだ。そうして、パチャクティはトパ・ユパンキに王位を譲り、杖(トパ・ヤウリと呼ばれた)を手渡した。

それから、パチャクティは領邦の兵士たちに一人残らず、クスコへの参集を命じた。と言うのも、そのとき、パチャクティのもとに、キトの住民が大挙して[インカ支配に]服従せず、決起したという知らせが届いたからである。つまり、善良な老王がかつてキトに到着したさい、住民たちに、

王の館と守備隊員のために貢物を差し出すよう命じていたのだが、彼らはその要求を却下し、自衛のための武器を整え、断固として服従を拒んだのである。〔したがって〕インカ王は是が非でも彼らを征服しなければならなかった。パチャクティは息子〔トパ・ユパンキ〕に彼らを制圧・平定する任務を与えて派遣した。まず、パチャクティは宣戦を布告し、キトの住民がこぞって〔インカ軍を相手に〕自衛の戦いに打って出るのを容認した(それは、そうして正当な戦争を行ったあとに、彼らの武器を手に入れるためであった。)老王パチャクティは一二万の兵士のほかに、同じく一二万の男を妻ともども送り出したが、それは守備隊として、また、ミティマエとして、キト地方に駐留させるためであった。

トパ・ユパンキは軍隊を率いてクスコを出発したあと、さらに人々を徴発するために王国中へ使者を派遣し、できるかぎり大勢の兵士を集めた。

トパ・ユパンキはかなり武運に恵まれ、次々と敵を打ち破り、反乱者たちを処罰し、生地から切り離して別の土地へ移住させた。その結果、インカ・ユパンキはいつも配下の兵士たちに、ワマニ〔地方〕〔を征服する〕ごとに〔手に入れた〕武器やクンビと呼ばれる素晴らしい衣服、袖つきマントのような羽毛のポラカウァス、楯や胄、つまり、金製や銀製のプラプラを分け与えた。また、指揮官や他の部将たちに対しても、冠(ウァクラカクロと呼ばれた)に加えて、金糸や銀糸で織った胴着を授けた。インディオたちの話によれば、トパ・ユパンキは行く先々に、銀細工師と武器および衣服を管理する役人を駐留させたい。そういうわけで、トパ・ユパンキは物資にこと欠くことがなかった。つまり、トパ・ユパンキは常時、兵士たちの働きぶりを讃え、報奨を授けるのに必要な物資をことごとく、あり余るほど所有していたのである。トパ・ユパンキはじつに誠実な人物で、皆から慕われていた。また、とくに指揮官たちには贈り物を〔惜しみなく〕与え、貧しい民には、いつも慈悲を垂れた。

トパ・ユパンキはキトに到着し、反乱者たちと干戈を交えたが、連戦連勝で負けを知らず、彼らを制圧・打破した。彼はカヤンビ人の住む地方にミティマエを残留させたあと、トメバンバ〔現エクワドルのクエンカ〕へ戻ったが、そのとき、カヤンビ人に対して、本来なら与えるべき罰を下さなかった。と言うのも、キトとカヤンビの地方の住民がこぞって、じつに謙虚な態度で、トパ・ユパンキに土地の言葉で〔懸命に〕謝罪したからである。そこで、とうとう、トパ・ユパンキも彼らの罪を許したというわけである。

ちょうどそのころ、大飢饉が発生し、飢饉は七年もつづいた。七年間というもの、種を蒔けども、なにひとつ実らなかった。インディオたちの話によると、その時、大勢の人が餓死し、さらに彼らの言うところでは、実の子供を食べてしまった親もいたらしい。そのころ、トパ・ユパンキはトメバンバで暮らしていた。インディオたちの伝えるところによると、飢饉のつづいた七年の間、アマロ・トパはカリヤチャカとルクリ・オチュリヨにある自分の畑で食糧をあり余るほど手に入れていた。さらに彼らの話では、アマロ・トパの畑の上にはいつも雲が垂れ下がり、日暮れになると、必ずといって雨が降ったらしい。彼らが言うには、〔畑の上に〕電が降らなかったのは到底信じられない奇蹟であった。そういうわけで、人々はアマロ・トパを〔神のように〕崇めようとしたらしい。ところが、アマロ・トパは、人々が創造主に背いて自分を崇めることを認めず、むしろ、へりくだって、飢饉のつづいた七年の間ずっと、貧しい民に食糧をふるまいつづけたという。アマロ・トパはいつも、どの人にもわけ隔てなく、実に謙虚に振る舞い、言葉遣いも丁寧だったと伝えられている。彼は〔飢饉の起こる〕はるか以前から、食料を保管するためにコルカ、すなわち、穀物倉庫を建てていた。アマロ・トパの子孫はカパック・アイリヨに属した。

そのころ、カニヤル人の町トメバンバでワイナ・カパックが誕生した。父のトパ・ユパンキと母のコカ・ママ・アナワルケは〔ワイナ・カパックの誕生を祝って新しい〕館を建立し、さらに、その館をいっそう豪華なものにした。館はトメバンバ・パチャカマク（「幸運な王子の生地」という意味である）と呼ばれた。そして、王子の誕生を祝して、また、その母ママ・アナワルケの懇願もあって、妖術師全員に恩赦令が下された。と言うのも、すでに呪術師たちにはひそかに判決が下され、彼らは兎〔クイを焼くとき〕のように、チュンタ〔椰子〕のガンガナス〔串〕で下半身から串刺しにされることになっていたからである。串刺しの刑を執行するために、同じような二つの泉（エスカイプキオと呼ばれた）が作られていた。すなわち、プキオが二つあったのは、二つの神を崇めた男女が二つのパヤプキオ〔罪を犯したものが溺死させられる湖〕で残酷な刑を受けることになっていたのを示していた。トパ・ユパンキはいつもライカ〔妖術師〕とウモ〔予言者〕を厳しく処罰し、数多くのワカを燃やし、ワカが祀られていた場所には塩を撒いた。しかし、それでも、ワカは消滅せず、むしろ、その数はますます増えた。

ようやく、トパ・ユパンキはクスコへ向かって出発した。そのとき、彼はまず先に、部下であるアウキ・ルカという名前の指揮官に、一万二〇〇〇の兵士をつけて海岸部の地方へ派遣した。アウキ・ルカは、トパ・ユパンキの名代として、〔インカ支配への〕服従を快く思わない反乱者たちのもとへ遠征し、彼らを平定することになっていた。アウキ・ルカは首尾よくその目的を果たし、一方、トパ・ユパンキは衛兵として仕えさせるために、カヤンビ人、カニャル人、チャチャポヤ人を従え、まっしぐらにクスコへ向かった。同じころ、キト、キラコ、キリヤイシンカ、チャチャポヤ、ユンガ、ワイラスおよびワンカ出身の少女たちが大勢、コヤに仕える乙女〔アクリヤ〕になるために—また、とりわけティクシカパック・ウィラコチャン・パチャ・ヤチャチのアクリヤ(ユラク・アクリヤ、ワイル・アクリヤ、パコ・アクリヤ、ヤナ・アクリヤと呼ばれた)になるために—やって来た。さらに、貴石、金、銀、羽毛などの財宝が大量に〔クスコへ〕運ばれた。

トパ・ユパンキは〔クスコへの〕帰路、キトからクスコにいたる土地に住むすべての人々に、畑の開墾、穀物倉庫(コルカ)の建設、街道の敷設、架橋やタンボの造営を命じた。同様に、すべての地方に、アクリヤ、クンビを管理する役人、銀細工師、パウカルカマヨ〔旗手〕、ピルコカマヨ〔羽の記章を管理する役人〕や石工を常駐させるよう言い渡した。トパ・ユパンキは軍隊を編成し、領土の安寧を願って、随所に守備隊とアンビカマヨ〔治療師〕を残した。さらに、トパ・ユパンキは、貧しい民のために、また、彼らが暮らしていけるように、それぞれの集落にサブシ、すなわち、リヤマや食料などの共有財産を備えておくよう命じた。

トパ・ユパンキがクスコに到着するころ、クスコでは、善良な老王パチャクティが戦いの仕来りにしたがって、三万の兵士を引き連れてその到着を待ちわびていた。そして、〔待ちくたびれて〕パチャクティはわざわざビルカコンガまでトパ・ユパンキを迎えに出た。それから、彼らは模擬戦を演じた。老王パチャクティは臨戦体制を整えた兵士と、御輿に乗り、日傘をかざしたアポ・クラーカたちを率いていた。そして、金や銀〔の装身具〕、それに素晴らしい羽根飾りを身につけた輝くばかりの二つの部隊が丸く円を描きながら小競り合いを演じた。

善良な老王パチャクティは息子と孫の顔を見て満面に笑みを湛えた。老王は将軍、息子は野戦司令官の役をそれぞれ演じた。パチャクティはアポ・クラーカを率いるオトロongo・アチャチとカシル・カパックに軍隊の

半分をつけて派遣し、全員に、サクサワマンの砦に籠もってクスコの町を防衛するため戦闘態勢を整えるよう命じた。一方、新しい王子ワイナ・カパック、つまり、パチャクティの孫は、全員、金や銀〔の装身具〕を身につけたその数五万にのぼる立派な部下を率いて、〔サクサワマンに籠もる〕兵士たちと戦う手筈になっていた。

そうして、彼らは喜劇じみた芝居を演じた。すなわち、彼らはシンカの北部から侵入し、リュコ〔小さな動物を狩るための網〕を使ってワラカ・ワカ〔模擬戦〕を行っただのである。彼らはサクサワマンに陣取っていた兵士たちを打ち破り、砦の中へ突入し、カヤンビ人やパスト人など、戦争で捕らえた人々を砦から連れ出した。それから、あらかじめ準備しておいた戦首にリヤマの血を塗りたくり、それを槍の先にかざし、敗者を引き連れ、アイリ〔凱旋の歌〕を歌いながら、大通りをコリカンチャまで行進した。コリカンチャに到着すると、指揮官たちは順番に創造主を象った、飾り気のない偶像を崇め、別の扉を通してキチュ〔口笛〕の歌を口ずさみながらアウカイパタとクシパタの広場へ向かった。クラーカたちは順番に日傘の下に置かれたティヤナ〔低い席〕に腰を下ろしたが、そこには、パチャクティが息子たち、つまり、トパ・ユパンキとアマロ・トパとともに座っていた。三人とも、ルーヴァン織りの金製のティヤナに腰をかけ、全員、カパック・リャオトとマスカパイチャを身につけていた。老王は金製のストウル・パウカル杖、トパ・ユパンキはトパ・ヤウリの杖をそれぞれ携えていたが、アマロ・トパは杖ではなくて、金製の小さなチャンピ〔棍棒〕を持っていただけであった。

領国の統治はトパ・ユパンキに任された。王子ワイナ・カパックはその年は一年中、コリカンチャに閉じこもり、外へ連れ出されることがなかった。それからようやく、カパック・ライミの祭りが実に厳かに執り行われ、コリカンチャの神殿に仕える三人の神官、アポ・ルパカ、アウキ・チャルコ・ユパンキとアポ・カムが厳肅きわまりない面持ちで、そのインカ〔ワイナ・カパック〕を「息子よ」と呼んだ（その神殿は現在聖アウグスティヌス会の修道院になっている）〔聖ドミニコ会の誤り〕。そして、三人の神官は二度とコリカンチャから出てこなかった。

そのころ、年老いたパチャクティが苦しみことなく、まるで眠るように息を引き取った。人々はパチャクティの死を悼み、王国中の貧しい民には、食料や飲み物、獣毛や衣服が分け与えられた。息子のインカ王〔トパ・ユパ

ンキ]は父パチャクティに仕えた小姓や亡き父王が生前使っていた什器を副葬しなかった。そこで、年老いた老練な指揮官たちは、彼岸の世界でも亡きインカ王に仕えるようにと、小姓や召使を、大量の小物と一緒に埋葬した。死ぬ運命の小姓たちには、まず大量の酒がふるまわれた。(インディオたちの話では、このパチャクティは金や銀を大量に所有していたらしく、その財宝はピサクの谷にある、三つの広間を備えた地下廟に保管されているらしい。)

亡きインカ王の亡骸は歴代インカ王の遺体が安置されていた館に運ばれた(インカ王は各々、妻ともども、家系ごとに、全員、防腐処理を施されて、館の窓辺に安置された)。パチャクティの死を知って、プキナとコリヤの地方の人々がビルカノルタとチャカマルカ方面から決起し、その反乱には、アンコライメ、アチャカチ、ワンカネ、アシーリヨ、アサンガロに住むウマスーヨ人のほかにタラコの人々もこぞって参加した。彼らは二〇万の人々を動員してリャリャウァ・プカラに砦を建設した。砦は兵士を全員収容しきれなかったもので、士気に欠ける兵士たちは砦から追い出され、近郊に砦を二つ築くことになった。

トパ・インカ・ユパンキは反乱者たちとの戦闘に備えて兵士を募った。そのとき、ハナンとウリンのケチュア人は兵力に自信をもっていたので、彼らだけで出陣したいと申し出た。彼らが執拗にその要請を繰り返したので、とうとうトパ・ユパンキも彼らに四つの地方の征服を認め、その承諾を与えた。そうして、一万二〇〇〇名のケチュア人兵士からなる精鋭部隊がクスコを後にした。彼らは立派な武器と兵士を率いて意気揚々と出発し、そのとき、ワカ、つまり、偶像を一体、携えていった。

一行はワルミ・プカラでクジャカ[キリヤカ]の女性たちを相手に戦いをはじめたが、インカ王配下のケチュア人は簡単に打ち破られた。すなわち、彼女たちがリャリャウァ・プカラという大きな砦へ引き上げたので、ケチュア人たちはワカ、つまり、偶像に加護を求め、敵を労せずには打破できるものと過信し、砦にいるコリヤの人々を攻囲し、戦いに打って出た。ところが、哀れなケチュア人は完膚なきまでに打ちのめされた。ただ一人、難を逃れ、敗戦の知らせをトパ・ユパンキのもとへ届けた。精鋭部隊が敗北を喫し、非業の最期を遂げたのを知って、トパ・ユパンキは涙を流した。

インカ王トパ・ユパンキはコリヤ人を討つために、一二万の兵士を率いてクスコを後にした。そして、[目的地に]到着すると、王は部隊とともに

陣営を敷き、リヤリヤウア・プカラの要塞を包囲した。その包囲と戦闘は三年もつづいた。そこで、敵に囲まれたコリヤ人たちはウアカルパニヤ、つまり、幼児や兎を生け贄に捧げて太陽に祈りを捧げた。すると、彼らのタタ(ワカに仕える人のこと)は、「[お前たちの]希望は叶えられる」という天のお告げを耳にした。そういうわけで、コリヤ人たちはまったく怯むことなく、まるで戦いの行方を知っているかのように、インカ軍に戦いを挑んだ。ところが、事態は彼らの思惑とはまったく異なる展開を見せた。

インカ王は三年におよぶ包囲の間ずっと、指揮官ともども戦場を離れず、祈りを唱えて[=祭儀を執り行って]過ごしていたので、憔悴していた。[しかし、コリヤ人たちの襲撃を受けると]王は怒濤の勢いでコリヤ人を迎え撃ち、その結果、両軍の間で、大量の血が流された。つまり、コリヤ人たちが銅や錫の大きな塊を[インカ軍をめがけて]落下させたので、インカ軍に甚大な害が及んだのである。しかし、それにも拘わらず、その日の戦闘で勝利を収めたのはインカ軍であった。

翌日、コリヤ人たちはインカ軍の兵士を怯えさせようと、全員、金や羽毛や銀[の衣装]で着飾り、四本の木に太鼓を八個つるして歌をうたいはじめた。すると、インカ軍の兵士たちも彼ら以上に着飾って、歌をうたいだし、半数の兵士たちがコリヤ人との戦いを再開した。その日の戦いは、雌雄が決せず、膠着状態がつづいた。

三日目、インカ王は直接、指揮官やクラーカたちを率い、太陽が昇ると、戦いに打って出た。そのとき、トパ・インカ・ユパンキ軍の兵士は大勢の敵を虐殺し、砦に籠もっていた人々を一人残らず打ち倒した。コリヤ人たちはすでに打ち破られ、インカ軍兵士たちのなすがままになっていたから、身を守るものがなかった。

チュチ・カパクは女装して砦から逃亡した。また、彼の配下の指揮官も包囲網の一角を突き破って砦の外へ出て、ルパーカ人の地方へ向かったが、ルパーカで、コリヤ人の指令官であるパリサカレスが捕らえられた。彼はインティのワカといっしょに、別のワカを携えていた。

彼らはアヤビリの町に滞在したインカ王のもとへ連行された。そこで、トパ・ユパンキは総勢一〇万の兵士からなる全軍の中央へ、それらのワカと、激戦の末に捕らえた敗北者たちを一人残らず、順番に引き立てるよう命じた。それから、彼らにこの上ない侮辱を与えるために、アヤチュコ、サイナタ、リヤマリヤマ、そしてチュニル[道化師など]たちを召集するよ

う命じた。コリヤ人の崇めるワカを愚弄するためアヤチュコたちに、その上に跨がらせたのである。さらに、インカ王は彼らのワカをオルコスの湖に投げ捨てるよう命令を下した。

そのころ、アンデス人たちがインカ王を討つため、クスコへの出陣準備を整えているという情報が届いた。そこで、インカ王はコリヤ人との容赦なき戦いを記憶にとどめるため、ビルカノタに境界線を引き、境界石と一緒に、金と銀の2本の棍棒を置くよう命じた。それから、インカ王はコリヤ地方の安全のために、ビルカノタにミティマエを住まわせ、〔インカ支配に〕忠実な首長に砦〔の警護〕を任せた。

インカ王は新たな征服遠征、すなわち、アンデス人の住む地方への進軍を布告するよう命じ、三〇万の兵士を率いて遠征に出た。遠征にあたり、王は軍の総指揮官にオトロンゴ・アチャを任命し、それから、カパク・ウェアリとアポ・キウァクタ、それに、チルケ人とパプレ人を率いる指揮官とカナ人を指揮する人物をそれぞれ指名した。彼らはマナリスーヨやオパタリの地方を見事に征服し、ワンカベリカとの境までを支配下に収め、さらに北へ向って軍を進め、カラバヤまで達した。そこで、一行は、ワルミ〔ウェアルミ〕アウカと呼ばれる、女性たちだけが住む地方を発見した。

それから、一行は滔々と流れる水嵩の多い川を横切って反対岸へ渡った。とは言え、川を渡ろうとする者がいないのを知って、かつてマナリス人の住む地方を治めるクラーカの配下だった怖いもの知らずの若者たちが数名、太綱(すなわちシンパ)を〔向こう岸まで〕引っ張るために水中へ飛び込み、そうして、一行は、彼らが張った綱をつたって対岸へ渡ったのである。それは前代未聞の出来事であり、エスカヨヤと呼ばれた人々はその様子を見て怯えた。

その地方はドラードと呼ばれ、そこには、エスカヨヤと呼ばれる広大な王国があった。土地は豊かで、住民は近郊のどの民族集団よりはるかに好戦的であった。彼らは人肉を食しているらしい。彼らは、悪魔と契りを結んだ人たちだったので、毒物についての知識をもっていた。しかも、彼らは優れた弓の射手であり、インカ軍は彼らと二度にわたり熾烈な戦いを交えた。三度目の戦闘でようやく、インカ軍の兵士たちは彼らを降伏させた。と言うのも、インカ軍は数の上では彼らに劣っていたが、もっぱら士気と武器の点では優っていたからである。すなわち、インカ軍は、秩序がとれ、態勢が崩れることもなく、また、全員が金や銀や羽毛で着飾っていたので

ある。結局、エスカヨヤ人たちはそれを見て怯えきったというわけである。

そうして、数々の命令を下すため、支配下においた地方とその住民の数を調べようとしていたころ、トパ・ユパンキが〔インカ軍を率いる〕ある指揮官に仕える部下の一人をチリワナ人の地方へ追放したという知らせが届いた。知らせを聞いた〔インカ軍の〕指揮官アポ・キウァクタはその情報をアンデス人の土地へ侵入していた部下たちに伝えるよう命じ、それから、オトロongo・アチャチ將軍麾下のインカ軍を〔アンデス人の領地に〕残し、部下の兵士を連れて郷土へ引き返した。その結果、エスカヨヤ人、オパタリ人、マナリス人が〔インカ軍に対抗して〕武器をとることになった。と言うのも、オトロongo・アチャチは片手がなく、不自由な身だったからである。

（そのような〔有事の〕ときには、為政者は部下を侮辱するような行動を取るべきではなかった。と言うのも、指揮官アポ・キウァクタが〔戦場を離れて〕姿を消したため、インカ軍は征服を途中で投げ出し、クスコへ戻ることになったからである。少なくとも、三つの軍隊が払った努力は決して、価値のないものではなかった。そのうえ、〔遠征では〕大勢の死者が出た。もしあの時〔予定どおり〕命令が下されていたら、今ごろは、アンデスの人々もカステイーリャ王室に服従し、とくにキリスト教に改宗していただろう。ところが、彼らはいまだキリスト教徒になっていない。いつ彼らが改宗するのか、それは誰にも分からない。）

そのころ、インカ王はカシル・カパックを総巡察使として派遣し、彼に土地と牧草地を調査し、〔境界に〕棒線を引く任務を授けた。〔もっとも〕総巡察使を送り出す前に、インカ王は〔同盟を結ぶために〕チンチャイスーユ人の住むタルマのクラカ、コリャク・チャワイを派遣し、彼に行く先々のクラカと飲食をともにさせた〔同盟締結後に行われる儀式〕。コリャク・チャワイが選ばれたのは、彼が神によって創造された、この地方最大の大食漢だったからである。そうしてから、インカ王はさらに畑を分配するために総巡察使を派遣した。

先に記した出来事の顛末を言えば、当時、インカ王トパ・ユパンキは国中から石工たちを集めてハキハワナで館の建設やクスコで砦の造営に携わっていた。そのころ、例のアポ・キウァクタが一万二〇〇〇名のコリャスーヨの兵士を率いてインカ王のもとにやってきて、王が部下を追放したのは〔彼の上官である自分に対する〕侮辱だと言って不服を申し立てた。すると、インカ王は弁解し、追放についてはいっさい知らなかったと弁明した

(すなわち、為政者は罪人に判決を下して罰を加える場合、事情に精通していなければならなかった。と言うのも、たいてい、為政者が曖昧な言葉で命じることを、刑の執行官たちは熟慮せず実行に移すからで、その結果、紛争や危険が発生するのは珍しくない。)それから、インカ王は臣下たちの話に耳を傾け、結局、追放刑を撤回した。

そのころ、チレ[チリ]の住民がインカ王と戦うために兵士を募っているという情報が届いた。すると、インカ王は一人の指揮官に二万の兵士をつけて[彼らのもとへ]派遣し、さらに二万人を[女性だけが住む]ワルミ・アウカ地方へ送った。指揮官たちはコキンボ人やチレ人の住む土地やトゥクマンまで順調に進軍し、大量の金を手に入れた。インカ軍の兵士はこれと言った害を受けることもなく、楽々と敵のチレ人を降伏させた。ワルミ・アウカの住民たちも同様に降伏した。インカ軍是一群の人々を移住者として働かせるためにその土地に残し、この上なく素晴らしい金をクスコへ運んだ。インカ王は上質の金が大量に運びこまれるのを見て、金の延べ板を作り、コリカンチャの壁に張りつけるよう命じた。

カパック・ライミの祭りでは、インカ王の穀物倉庫に保管された食料がタウンティンスーヨの住民全員に整然と振舞われるのが仕来りだったので、クラーカや平民たちはインカ王トパ・ユパンキのことを吝嗇だと言って不満を洩らした。その噂がインカ王の耳に届くと、王は翌年に備えて実に大きなケロ[椀]、オルプ[壺]、カラソ[盥]、ウアンポロ[皿](それらはいずれも、大皿と中くらいの椀である)とアキリヤ[器]を拵えておくよう命じた。そして翌年、インカ王は彼らに一日三回、飲み物をとてつもなく大きなケロに入れてふるまい、彼らが小用でその場を立つのさえ許さなかった。

当時、アンデスのオパタリというところから、三〇〇人のインディオが全員、粉状の金や小さな金の塊を担いで[クスコへ]出てきた。ちょうどそのころ、気候はまるで年が改まる時[十二月末]のよう[に寒冷]で、その夜、食物はことごとく、根にいたるまで、完全に凍てつきはじめた。それで、インカ王は、老翁たちの忠告を聞き入れて、三〇〇人のインディオ全員に、彼らが担いできた黄金の荷物を天高く聳えるパチャトゥサンへ運ぶよう命じた。それから、彼らは一人残らず、荷物の金ともどもパチャトゥサンに生き埋めにされ、殺された。その哀れな人たちは今なお埋められたままである。すなわち、トパ・ユパンキは彼らに感謝するどころか、逆の仕打ちを加えたのである。そして、現在に至るまで、その大量の金は掘り出され

ていない。インディオたちの話によると、金を埋めるために、太陽の上る方向に面した場所を地中深く掘ったらしい。

トパ・ユパンキ・インカ王は天寿を全うし、兄であるアマロ・トパも大変な高齢になっていた。そして、二人とも、同じ年に身罷ったので、ワイナ・カパックが誰もが認める王国の後継者となった。しかし、ワイナ・カパックはまだ年端もいかない子供だったので、アポ・ワルパヤが摂政に任命された。アポ・ワルパヤは、かつてパチャクティ・インカ・ユパンキの死を悼んで行われたときと同じように、軍隊を二つ－全員が男の軍隊と、同じく全員が女の軍隊－編成し、トパ・ユパンキの死を悼んで、前王のときにまして盛大に喪に服すよう、王国全土にお触れを出した。そうして、大勢のヤナ・パチャコや、亡きインカ王にこよなく愛された女性や召使いたちが副葬された。この人たちは選ばれた人であった。その件に関して言えば、インカ王は彼岸の世界でも、大勢の従者に傳かれなければならないと、野蛮な指揮官たちは信じていたらしい。それは異教徒や信仰をもたない野蛮な人たちならではの考えである。

話によると、その摂政兼補佐官であるワルパヤはタワンティンスーヨの王国を糾合して反乱を起こそうとしたらしい。そして、決起の命令はすでに下り、いたる所から武器を携えた人たちが指定された〔決起の〕日に備えて、ひそかに〔クスコへ〕参集したという。

ワルパヤが太陽や月、稲妻を崇拜しはじめたらしい。そして、彼は王国全土にも同じようにそれらを崇拜するよう広く命じたという。人々は山々へ赴き、従順に太陽や月や稲妻を崇拜しだした。ワイナ・カパックはまだ幼い子供だったので、祖先に当たる歴代インカ王がコリカンチャに安置したものをすべて、同じように崇拜した。ワイナ・カパックが理解したところでは、歴代インカ王は自らが崇めるために、それらをコリカンチャに据えたのであった。インディオたちの話では、摂政ワルパヤはそのような偽りの神々のために畑を割り当てたが、一部の性悪なクラーカたちもそのことを耳にすると、喜んで同じように振舞った。（したがって、土地を治める王たるものは摂政の仕事を委ねるか、摂政を任命する場合、欲深い者や慎重さを欠く者ではなく、清廉な信仰心をもつ人物を選ばなければならない。と言うのも、聖俗に拘わらず、万事、摂政次第だからである。つまり、キリスト教徒と野蛮な人たち〔インディオ〕とは、文化や習慣に違いがあるの

である。願わくば、私たち全員が正しい意思をもてますように。)

先に述べたとおり、ワルパヤは、人知れず、決起しようと企んでいた。そのころ、ワイナ・カパックの庶出の叔父は、ようやく夜が明け染めはじめたころ、ほんの束の間のことだったが、まどろみ、現実と夢の境をさまよっていたとき、クスコの町が見事に規律のとれた人々に包囲され、矢を手にしたワルパヤが王子ワイナ・カパックに狙いをつけている光景を見たらしい。その様子を見て、叔父は、まるでそれが現実であるかのように思い、にわかに身を起こし、以前にそのような〔夢をみた〕経験がなかったので、いろいろと想像を巡らせながら、館の中を歩きまわった。

それから、叔父はクヨスマンコの館へ赴き、司法、軍事と財政を担当する評議員全員に評議の館、議場へ参集するよう伝えた。すると、摂政ワルパヤは、評議會を解散させようと、使者を派遣し、なにか新しいことを行うつもりなのか、それはいったい何なのかと問い詰め、白状しなければ殺すと脅かした。評議員は十二名の長老で、全員、立派な人たちであった。彼らは摂政の脅しを無視して評議に入り、事態を確かめることに決めた。そうして、見たことを話させるために、庶出の叔父に出頭を要請した。叔父はこの次第を一部始終、語った―彼らは叔父に、三度も同じ話をさせた―。

そのあと、評議員たちはまず、ワルパヤの仲間たちをひそかに逮捕するよう命じ、ついで、指揮官たちには、武装準備を整えておくよう命令を下した。そして、三番目に、五〇名の兵士を各街道に派遣し、不審な動きがないか、巡回して監視するよう指示した。とうとう、アポ・ワルパヤ一番の寵臣が白状した。すなわち、彼は、ワルパヤが全土を糾合して決起を計画していることや、大勢のインディオが武器を忍ばせたコカの籠を背負って街道を行き来していることを白状したのである。インディオたちは尋問されると、インカ・ランティ・アポ・ワルパヤの命令に従って、命じられたことを実行しにやってきたのだと告白した。

当時、ワルパヤには、大勢の僕や衛兵が仕えていたので、評議會や審問院の人たちは彼を逮捕できなかった。と言うのも、門番たちが誰も中へ入れなかったからである。そのとき、クスコには、クスコの王家を守ることに心から忠誠を誓った〔インカ支配に〕忠実なタウンティンスーヨの指揮官たちがいて、彼らは〔事態を知って〕合流し、その数は五〇〇人に達した。彼らは神殿からカパック・ウナンチャ(歴代インカ王の御旗)を取り出し、

太鼓を打ち鳴らしはじめた。それから、王子ワイナ・カパックを連れて、摂政のもとへやって来た。衛兵たちはその様子を見て、彼らがワルパヤのところへ入っていくのを認めた。ワルパヤはすでに武具に身を固め出陣するところだったらしい。また、ワルパヤの側には、絶大な権力を握る大勢の指揮官が控え、大量の武器が準備されていた。

彼らはすぐさまワルパヤの身柄を拘束し、首を刎ね、陰謀に加わった者たちを一人残らず逮捕し、処刑した。また、各地方から〔陰謀に加担しに〕やってきた人々は、罰として、イルワヤ〔重い石〕を背負わされ、それぞれ三回づつ、殴打された。

そうして、事件は落ち着し、それから、審問院ならびに軍事、財政、司法を担当する評議員たちはタウンティンスーヨの王国中の人々に、ワイナ・カパックの戴冠式に出席するよう命令と通達を出し、摂政を任命しなかった。(つづく)